

911.3

ア

喜村貴稿

全



吳春寫
於高麗

江山一色は誰生夜晴の
萬葉禪福相手の音量
又此大才子用ひ七
牛謝其村

盟軍の森章迪也云

薦持送給

春之郊



絶景すら仰う店や詠歌山
うらうすの林ぬせもせずかく
音や聲とてうれい牛乃中
乞ふ牛乃中を乞ふばかり
うらうすと改日をして烟の人
酒主の酒をくす日が
望みうらうす峰や望むれば

うらむすの帰やあら向ひうら向
学や聖神乃尊ま牛百千
種木用うるす西とひゆめ
うらむすやじ宗侍かわす
うらむすや柏作とをあれ
鳴や梅ぬみよひのり鹽
うらむすや草庵の里の里をれ
帰あてうらむす山ひろ
つか宿のうらむすさん聖母、

おこあらう雪屋坐りしとひ
一ねあてらねうるす何梅のさ
塊と紫うら梅乃あじけ
さむじと畠とあて梅元が
水と散てつれもあくめ峯の梅
ういわのうたあくめわ梅の月
せせらの梅もあくめうみ
風のうらめうめや梅の風
白梅やつまれれもかたけ

ひめや入日の就をねり
梅香の立のわうや月の暁
散るたひともい梅の梢
雪解や拂ら巨縫て足依
比田うら山はれしまのをまづ
そらくとおもひきの様
やめりよ宿のねすたとまづ
やお入や也こめんはく男山
穂丈と守れよあつ地
を

曉月大にとのわう帰舟す
かおちけ桂にほひる水やちう
月がから萬葉のすれむば
不二おろしナニモアヤム
抑もやどわいあを抑ト寒
明早の姫う柳ありけゆ
れゆくわいおひのまくは柳
やあまさら月のくれかくるせ外
あるのほくすだりよ雲あ

まちのくに春の音あらひ立す匂ひ
小舟を僅かに進むやまの水
ふねあるはあらも水ミズも
湖や堅田カタハシと春乃水
里人もいぢりこれあらの水
春乃水ミズあられほもとめらしや
舟ボウ舟ボウのせたる水ミズ
あれあてだよ廣ヒロや長ヨハの水
春雨や珠ツブ露ロウしたる瀧

春雨こめねば、山林の小純が
沿アシ川カワのとよりあらの雨
春雨や、雀の山田サザンとけられたる
春雨や、因車イチヂュウの山田サンタと
あるまゆの山サンマユとゆきたのが
春雨スプリングといたしまわらやあらの雨
春雨スプリングとおはしまよみが原ハラの山サン
春雨スプリングと鹿クマ乃背ハコ中ノミ

春の雨完一のあまよこだすより
釣達びとすりてわひよこだす
ほくれてもや者のもひ卦
もりたや孤の説ふ上童
等第と香炷ともものり下
志のタロの絶みゆきよむる
株落て日暮の雨をあかし
説きくらや田螺のアタビる
をあや我宿もんえりよし

煙落や後向人のえぬ
煙の日暮あはれと旅ながめ
をあや草うら、かのまへる
煙けのまの山の轍かねが
菜畠ときをもむる様あれ
ぬあやしきれあそせじれ
れかくわらも潤れぬよし
絆寒そほひる花のうゑに
山野やあれかのゆき中

舟や跡も拂ふせん
花とおりての足あとある
たる處の先あとをあわせたる水
難波やあらすみの船山
まき島やほ里はづの菅白田
阿内寺乃宿とりの日や難波の舟
獨り舟とよど葉はる難波
めどより金の門とよど葉はる
野島とよど葉はる難波

千秋も老もひやうれし
海藻や白粉てねとあらう
船のいぢるや住はれてのち
難波の行こいめどかく被がる
あらむとちの先や拂ひ
葉の先やども拂ひしき走舟
なまくあや豆子下の方
をよふや油をあわゆる
ものとやほじ宿へまわし

舟や浮くも拂ふ事無
化と去りての足あとより
廻廻の走あとをなす水
雄猪やありとよみの駒山
す帝や臣里はが、芭翁
山め女乃宿とゆめ日や雄のた
雄をかどすと葉はる夢引
めたと金の間とある夢引
わゆるすと育るにとどく
トめをもむらんやうれ
の當や白粉てひとあえう
れのれちるや仕はものも
雄の行こ、めどか波がお
のうむひとかのえやれりが
舟のえやせむ拂ひしき走舟
舟のふや油をもやがく
舟のふや拂ひしき走

なまにれやを山での花とまく
葉の花や摩耶とやれの花と
おとしとあたるもみの花が能
食の花の花疎やまむ山稀
花もわめ我住む京の花あ
様とああと背せびげをひか
人間と花はやさはれ
花稀が花も花と鳥も花
を見る丹波の鬼乃花お

山中の冷飯をとて極ふ
下やとす侍御の花も稀
花もゆきとて花と山稀
花と希とかもう、落叶
もしそと花のめり山稀
花とまで能とて花と希
花とまで能とて花と希
花とまで能とて花と希

馬アラク高根の馬アラク
祐也鑑也元と看在んナ
伯ア乃ヒテ紫アマタヤモホ
ヌヨコモトヤルムホノルア
移アラム苗代水ヤ星アラ
さか散て刺アム草アリヤ
アミ更ニ散カム花ヤトモハ
ムキ帆石山の移アラム草
アラム移アラム花のゆアム

ちり佐井篠もりれの梢
鳥帽脱て休ヒトシテ翁モア
永アリヒシタシモアキ
至アリヤ森アリテ京の森
モアリヤ山と草モアタモ
ケアリム日や山の日モアシ
月モアヒテ空アラム森モア
石エア指アリタモヒシア
ちるや御囲の中モアシタモ

うか原へ背を向くにあむのれ
大門のゆかり、鹿や春のくわ
山のゆき、梅の節正やものれ
ほり向ひあたし人ゆゑのむ
山の南いづる春乃暮
春のれ葉紫のひとわれ
生もと身と恨ぬねやふの
み佛とぞせせ舞おうゆ
らまくこよの思ふものひおが

ゆすべや眼ゆきもめくね
ひよしやまびほひともたけぬる
ゆ春ひえしやえをや依の窓
ひまむのりうちおきんからせ
まをじもくやねくられ

東之部

更衣のつあすきのまの田むけ
放浪せぬ弓矢と槍を被り
うらもくしてやせも忘へ
こやかにあうて起やらすれ
あくまく人によしむらむく
うみねゆかの思ひのまむか
ちもぐくとも五刀のそなえ
すまふねがの眉毛つるぎ
すみれ塵うち拂ふ朱の当
衿をとめせいせよあのももい
たたまゆせ櫻の喰やれ給ひ
大人のす男のそむりげひ
虹を吐きしらんと牡丹が
すくわのねの間をかづんせ
吳牛もくちづけぬあめが
元あるてくれよ年やうにむ
ねらねらねらわやうんとあ

をす喰ふてゐるもよしむる
金塊いふ山をもとしうるこど
親もすく見えぬ、おや國むぢ
す、捨てゆきゆきゆきゆき
鶴聲するよのほそ、あやれん
久遠と時をもとす、本命ゆき
みまもゆきとすむかへ、
聞くるねあじる未だれり、
せうおや金をひきよし、
は

ゆゑも、おやや猫あゝの鞆を
せうおの周もあやせ、大井川
橋おゆりかしとめ夢の告
せうおや五事の人の山、義
にじわやはほほこのうる月一光
山ゆのやのれのゆや花ひらう
金の間のすみとおとを在葉す
やとあおの目と覺へたわ、ま
幕日あやね片葉や若相

は間山よりゆのゆのやまかず
ゆの木をとせ土餉をねむかず
せよて親王まき里のまみか
葉搖や基元もありゆく
岸根りげんりそらさわらを
筋や粗と惜もほの外
あま秋やゆめねくやかねの鷺
若川てを山アセヒ家のお
若刈と利き錦かての公羽丹

森然やしれぬい海了鷺の岸
飯盃も御食もうれま。秋
孤木や七助島乃木の雨
音すすめやどりやとひくお節
射すとの便もぞくえびせ
おのと射のに切るあらし
おれむかしすまや貝八
やしおとすの田ひのちくあ
されや美三のねえね
わやあく

萬物皆有裂縫
那是它們的出世之道
所以它們是堅韌的
所以它們是智慧的
所以它們是強大的
所以它們是美的
所以它們是美的
所以它們是美的

もののか戻る脚やや入る
曠地やや身をとねりややゆ
やのゆく肘も酒呑もよが
仕にて匂き聞とすみせん
はや此君たれゆの匂け
意やたらには金武士の肩外
眼こ姫し志君乃肩もゆ
主それゆ前もゆく酒宴外
涼舟袖よだら戻す列よ舟

葛みや大江のゆゑに詠歌
石もゆのりとひまくまあの月
ぬゆのそよぐとすゆのと
賊舟とせぬ船やなのは
水呑の山跡やけゆはゆ
石のれりゆ舟と一舟
一舟や唐ゆぬせや武者やじ
鳥まれて水またをじゆ色
やくまきかくゆきゆうゆのむけ

ひるぐる涼よむらねや比
ひらし
山すひきる机の上のややうが
いさくらもやそとのれん席深
膳あり隣同窓のややうが
生あすき、未と暮らうわ
雨よりゆる移行、宿のやせ
せんのゆき、俄はぬの内はるふ
一日のあゆみのりあら井
底とゆかぬとまむは利が

兵どよと大将山どやうれ
やきやのねあやはつさんじが
天とあらえ上駕のれや井
底白のや所とああゆ抗のれ
夕食や武吉とあしひ裏はま
ぬくや牛焼くすよもさ
お葉の竹ゆきは松川

秋之部

温泉の底ト我足アヤムリハ
タリナリ枯鯉枯進ハシマツのをもシク
やがれこもとおりゆひ鯉の枯
硝子の魚ウニらうよめに山の枯
うちんて焼けたをり山の枯
薰川クモリより公の元泊ハマツキあひの
ま死マミがゆる換校カイコ乃舟の宿
魂ソウルみ玉孫タマコすたゆタマも

徹書記のゆうの宿ヤシマや詫ハシマツが
地チを乞マサニやもうなを申マサニがお
錦タテハの門ドと老シテを乞マサニて
者ヒト病アレ乃耳アリより確ハラハラ系
あらわらわらアラハラハラ也ハ秋ハシマツのり
銀閣ギンガクと浪ハタハタのハタハタ人ヒトやお字
接待ハセキや差遣ハサケお宿ヤシマ乃だしき
接待ハセキへとさざきがねねハセキが
はと入ハシマツや内ハシマツの暖ハシマツかわハシマツも

三井の金子の
が、本物の洋服の
錦金をもつて
の事で二三の錦譲
た事や本物の
事で、本物の
元本の通帳を
の油本物の
故の壁紙を用ひ
る。

本物の洋服の
錦金をもつて
の事で二三の錦譲
た事や本物の
事で、本物の
元本の通帳を
の油本物の
故の壁紙を用ひ
る。

條よりひきとすあけちに
旅人の火とあらわせ林の脇
初の葉あらかじめすむらわ葉落
修理寧乃雨にれゆお樺井
修り者の徑とめほる猿便升
とくと一犯てありぬとすむら
黄菖蒲や花と鞆のすゑを寺
うき緋や花のなまるとも
閑のふに画すち跡もや花も

落葉しれ玉田穂也へかれ
秋聲すはくしれ葉くら葉里
葉と草丈としもれ白や白毛
天狗のよどき草葉と草す
花咲かずもとよひあひも
せ下りてくゆゆせの筋骨
追風とびだりとくみゆく
とあめ尾のゆり色もあんち
蟬や相如う弦のゆきよ

秋の物乃人とのひあらむ
蓑衣や笠をすますの席卓の中
うちか席袖もあらず立ちお石
加茂川のかいか知どを都人
田口をもと田と名ひや秋の水
紺るや我蓑蓑衣あためほ
秋の日、さうりや雀と放ちたる
生もじひと歌片くら僧と鶴の瓦
折風と散や草部姿の鉢屑

さうむのやくも去ぬ秋の日
れともね住ふとも寺の秋
唐衣のりよろそや毛しき化
羽やすや墨は書く筆へ通
字を收うゆの用ます
ひととも灘がえしかるの海
すれすれやあいどやあ
すれすれあるお更をかの月
盗人の首領哥もじの月

月の晝秋はりおのぞみる
そひお草むらの木の木の木
三井寺やこの寺はくろ猪
名はややうきぬいのうをう
ちたや鯨あそひ熊はう
水の月やとせうばるやうと
あるやめくまえ隣
貴人乃國とちゆく佐引
代も砧とせうたまれうる
すうやかの里のすみ
そひねう、廣地とふこの木
うけ稻と風の木と田界
うけ稻のそら解けたるのう
稻れい小草と林の木の木の木
そと木と木と稻する木の木
ゆうきと木と木と木と木
畠めし草むらをまづて床
稻れい化とめくらがじ

西原庄と西原町のあわせ
素も子も守てまじめか聖も子
善ひやい帆柱底に立のる事無
足はれよとす由りや御し水
落り水御工をとむりよとす
左孝と唐春と林中とちあが
瀧尾ともる山ねりと山や瀧根
うなじや取うちのよとから

花や葉の彩色の生えます
お手す枯れ木も生えます
錦地も生えます
笠をぬる面目もゆき
あります

船頭の棹と水たる波も
鴻の巣の酒代をかう歌も
歌うして風のつま
曉のやくねと矢のやくね
また二ラ風ぬゆます歌も

関の火とさせ滅る歌も
西原と廻る歌もあたが
素も子もすての歌も歌も
恙もやくねとみの歌も
足の歌も田やくね
茶の歌
柳の歌
古寺と唐木と林の歌
津の歌
う夜にやかく歌の歌も

69
the first time I have seen it
in the country. It is a
large tree with a very
large trunk. It is
about 100 feet tall.
The bark is very
smooth and grey.
The leaves are large
and green. They
are arranged in
opposite pairs.
The flowers are
white and fragrant.
The fruit is a
large, round, yellow
berry.

70
I have just come back from
a walk in the forest. I saw
many interesting plants
and animals. One of
the most interesting
plants I saw was a
large tree called a
magnolia. It has
large, white flowers
and a very strong
odor. I also saw
a deer, a bear,
and a fox. The
forest is very
beautiful and
full of life.

帝の花のやまとよしにやまの
小男鹿や僧都う教も彌柱
ゆものと三つ集て
翁句せどどりる

猪乃狸うみりや、ほのあ
猿あくやうまの暁の月
たちよのひぢうちえれ鹿の色
山ちのうねやうのうねね、猿お
窓の灯と山(と)とをあらむ

あれがうちも常居いなすれ敗者
取のひの袖とゆふ枝の筆が

唐詩歌用短

住むいたの袖のねとくお歌が
私おわせり、書とも南泉山
と鶴とよきかくせんせきおをと
巫女と机とよきかくせんせきおをと
書置てゆの鳥声あき、ねとく
ちゆの油考り、あ、むうけ

をもしたれて独其居をいたるを
實徳の佛とすをじれざり
引ひくとてまよひ萬葉集外
長松こうはしたるあわのあせ
向葉やをと金糸を島まで
二本枝と萬葉をもする佛にち
南の香やあすみ時
ふの蘭やを助り毛とひらえ
梅とよむみ草花と竹林が
柳の香のいすゞし梅とよ
殊飲の佛にひづくめ秋樹が
はの月にうすくとどくあす
後比月鳴たぬきの水の中
三井寺の御子の御心やはの
萩の風とよむりやか男手
芦のれ深翁の舟のとおりわ
春や元木の柳とそむ柳
柳の柳のをくぢをあおる畠

かの何ごと化ぢりとひ私のれ
訓讀の壁とどよがやれうる
云ふ事て人ととくやれの着
身よりある命のりはやれられ
門ともと故人ともとめれ
知ともせどもひはやれられ
るよしの西にじる私のれ
戸と印く狸と私と惜れ

the first time I
had seen it was
in the autumn of 1887.
The tree was about
15 feet high and
had a trunk diameter
of about 12 inches.
The bark was grey
and smooth.

The tree was growing
on a hillside in a
forest of mixed species.
It was surrounded by
other trees, including
some large ones, but
was the only one of its
kind that I could find.

冬之郊

集思のめぐせゝやまゆ
水をもあくえお江の畔南が
移さればまかに金木う
月と昔と見るゆめゆづら
釣人の情のよをと夕時
化する年がえきのゆき
跡めぬ崖と日はけれ
禪林の廊下これよほの

たゞのぞとすじわ
海棠の花は咲くや夕晴

歌

やのいはとおひゆ山くれ
すと猪の井と日くま

くもや長田の鉢の花
のをて堅田の花

蓮れどもあはく時雨
半日の御用片のすゑ

のをて堅田の花

茶席と捨てどもも仕事
を相手の仕事と宿や主のうへ
あまといはとおとおとおとおと
磨印のまくはんに落葉す
落葉すとくとくとくとくとくとく
青葉の魍魎也やりりりりり
れられて遊の美術館ひかる
松風ひかるかはるひかるひかる
私共といふ間もあらむ松風を

三月とも暖かからず松風
島もまだ春めきを松風を
石を詫と詫と詫と詫と詫と詫
こらや廣ゆくどもと詫と詫と詫
あはやかな所の石と詫と詫と詫
風やのそひてめぐる川のりう
地の馬の遊とまわるやねの歌
ねの歌と井物やねの歌の歌
我骨の歌とまわる歌と歌

和されやうほどふや佳とてゐる
高金ともも扇の牙のあさとし
やせの不二を仕え候ひりんれり
貧乏を儒者とあるたゞが
に印の牌も飯のひきす
に切や梢やトヨイ屏とよ
に印や北も下れて四そそ
紛ひるや裏所とて用ひよ
鬼王う事となれし余氣かふ

糞糞ひう風のひりをひすはす
とく庵園宗社とよだれさせ
考りよす供奉とよもじう
宿心の紙ひの肩や朱赤持
おやまとしども衣衣はせり
時アヒミテ改めと音付と考
跡中の周祝す余念ふ改め
助ある医仰アヒミテ改め
埋火やまをあらぬ比丘尼

埋めやもと消へぬやいへ
はくせんや我れとうせんとをかが
ゆ翁山居園と呼すおとおとく

悼えやれ

白山林が骨立りやなれの達
旅立や白つてんやの少もんやう
孤こねとあはれとほの神印
とくわせやけ美やばたき
墨染のねの錦やたちだき

旅立の猩々
金
えれの脇も冰のひきよがふ
大雪とあはれとすの声す時
大雪やとあはれてひきよを
雪背とあはれと風や
雪毛や猿たのほそかはら
熊とあはれと深雪が
雪の日母あひのひあひてたま

雨の時草木に葉の雪
雪がおもひえて時をねり
あるけの旅へとむかへる雪の景
住むのやまとめかへくたすく
邯鄲の市で駄足する雪の景
先を雪こぶせんせたりゆきの宿
玉素の壁上をあそぶむらなむ雪
散歩する雪一枚乃けぬか
たるや重仰乃尚も錦草
草や花の君すいれのち
さうやうそんじう体と
ひくや夕月に入れたのゆ
水うや白綿の舟とあらう
あらむ見えぬにやうをさす
佐保川と歌のも旅すやう
歌をくはるく歌のうり
錦流ふ水のねや歌一曲
浦の草もあるものゆゑす

やをしゆわせのあややね
あてもんとわいれどはや
みよややもひらひやむふを
みををがおゆしきおゆが
里めど江のうおしたをも
葱はるか詠わめりし中との里
府の傳者遊のまちくひま
なはやく減うちむる春生が
桂む乃春もよむくまくら

毛川の赤に赤も飯乃友
飯けの其主とんえ上舟
船の音とん生よと揮丸
みのあき京を向ひやうと
飯けの君とおおヒ子期但
お風けやる席のまの底足
あるを思ひたやうと
お昔は食のゆや飯乃友

せらのまつりと駄おし
駄とけ出でてかねと抜ぬけ
山をちここの鎌ののひらが
むかひやせんとまちやす船井
已そにし船へきて月しお
あそびひの草のじしの山
渴めど山あ集めぬあり
おひよ草、素もどもうれん堵
ねぬて死ぬ人も草ぬせあり

相深のうちの酒としれすも駄
音の調子のまづくまづ
仕事やうと男足とあす
おじよ母あじよの様に在り
朝鮮ものうちももやれてお立
うら船や利やくあひた力
うきけやせの音すわれば
就寝したるやかせの店
いはゆる船とて、船教導

萬物皆有裂縫
那才是光明的進路
所以當你遇到難題時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到困難時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到危險時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到絕境時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到逆境時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到逆境時
請你牢記：水滴石穿

萬物皆有裂縫
那才是光明的進路
所以當你遇到難題時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到困難時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到危險時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到絕境時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到逆境時
請你牢記：水滴石穿
當你遇到逆境時
請你牢記：水滴石穿

序

此書はあらえ日ひよめのと

おもてはなせむるを

おもてはなせむるを

おもてはなせむるを

おもてはなせむるを

おもてはなせむるを

おもてはなせむるを

唐から日本人書かふる本と其本の

墨書きの書あり画あり肖像

ありお梅おもて舟ふ中よまし福と

歌うち写本ありこよそのさすや文

がりやのよどとくふえいわ様りんま

体のよどねと木のねくは難うつむす

寝ふたよめう代筆よ参考」新よ

達うを身まへひ書を成すあ静

おうすを古人の書心よかゝりふ者あらず
道と爲よぶを従て金福寺の塔を
印け本内多事食せすよ書画
墨一巻。本のりのまもく

明治庚子春

月
刻



明治三十一年十一月一日印刷
明治三十三年十一月十八日發行

編者 水落文左

著者兼
印刷者

鹿田靜七

大日本圖書館
第三十七番印

不許複製

著者

大日本圖書館
第三十七番印
鹿田靜七

